

# 3 ヨーロッパのカフェ文化



飯田 美樹  
IIDA Miki

カフェ文化・インフォーマル・パブリック・ライフ研究家  
東京大学特任助教

ヨーロッパのカフェには、近代から現代まで変わらず人々を集わせる魅力がある。カフェは誰にでも開かれた空間であり、何かが生まれる「場」であった。ヨーロッパのカフェが社会の中で果たしてきた役割を探っていく。

## カフェに集まった知識人

ヨーロッパの近代文化史の中で、カフェはどれほど重要な役割を果たしてきたことだろう。17～18世紀、イギリスの発展を支えた貿易業に携わる者たちは最新の情報を得るためにロンドン中心部のコーヒーハウスに集い、そこから新聞や保険会社が誕生した。

1686年にパリに誕生したカフェ、プロコップはフランス人にコーヒーを飲ませることに成功しただけでなく、大理石のテーブルや、壁に取り付けられた多くの鏡、シャンデリアなどを使うことで豪華なパリのカフェの原型を築いた店である。この店には啓蒙思想の哲学者たちやフランス革命の中心的人物も集っていた。フランス革命に対する議論の多くはパリのパレ・ロワイヤルのカフェやプロコップでなされ、文字の読めない人が多かった時代、新聞や最新ニュースを読み上げるヌーベリストの声に多くの客たちが聞き入った。

1720年にヴェネチアに誕生したカフェ、フローリアンには美しい装飾の小さな部屋からサン・マルコ広場のテラスに至るまで、数多くの芸術家が集い、ここからも新聞が誕生した。フローリアンにはヴェネチア市民だけでなく、カサノヴァ、ジャン・ジャック・ルソー、絵画評論家のジョン・ラスキン、フランスの女流作家ジョルジュ・サンドなども姿を見せていた。ゲーテはローマのカフェ・グレコを愛し、彼に影響され、イタリアを訪れた



写真1 ヴェネチアのカフェ「フローリアン」のテラスとサン・マルコ寺院

ドイツ人画家たちは夕方になるとこぞってこの店にやって来た。

19世紀末には分離派の芸術家たちや若い作家たちがウィーンのカフェに集い、そこから芸術運動が生まれていった。

20世紀初頭のパリ、モンマルトルやモンパルナスのカフェに集った世界的な画家や作家、音楽家は数知れず、マネ、モネ、ルノワール、ピカソ、モディリアーニはじめ、カフェに集った画家たちの名前を覚えれば20世紀前半の美術史の大半が理解できるほどである。その後パリのサン＝ジェルマン・デプレのカフェ・ド・フロールに集ったサルトルやボーヴォワールなど、実存主義者といわれる哲学者たちは世界の若者に影響を与えていった。



写真2 ヴェネチアのカフェ「フローリアン」の店内  
写真3 パリの歴史的カフェ「プロコップ」の店内  
写真4 ウィーンの芸術家が集った「カフェ・ツェントラル」

## 客たちの自由な中立的な空間

では何故彼らはカフェという場に集ったのだろうか。

第一に、カフェは街中に存在し、誰にでも開かれた、長時間滞在することのできる格好の居場所だったからである。自分の家は狭く、冷暖房設備も整っていない中、カフェを訪れば暖房もあればまともな椅子や机もあり、彼らはそこで何時間も過ごすことが可能であった。

第二に、彼らはメニューに書かれていないものを求めてカフェに通ったといえる。過去から現在に至るまで、社会の中で与えられた役割や仕事に満足し、特に疑問をもたない者はあえてカフェに行く必要はなく、彼らはそれをお金の無駄だと感じている。だが、カフェに通う者たちは、お金がなくても生きるためにカフェに通う必要があると考えている、少し変わった者だった。

カフェに集い、歴史を変えていった者たちは、はじめから偉大な人物だったわけではなく、大抵の場合は既存の社会、大勢に馴染めず疑問を感じている若者だった。多くの者は大人になるにつれて社会が要請する価値観と折り合いをつけ、それなりに順応して生きていくが、カフェに集った者の多くは、自分の生き方を曲げきれない者だった。

カフェという場は社会の中でも例外的に、社会の要請するコードから免れた独特の空間である。カフェという空間では、ここではこう振る舞うべきというコードは一杯の飲み物を注文すること以外には存在しない。カフェにおける飲み物代とはその空間への入場料であり、

他の客に迷惑をかけない限り、そこで何をしようが客たちの自由という中立的な空間である。

## 新たな知を育むカフェ

歴史に名を残したようなカフェには、一風変わった者たちでも受け入れてくれる懐の深さと、彼らを一人の人間として受け入れてくれるあたたかさがあった。社会の中では変わり者として扱われ、葛藤を抱えた彼らは、カフェに行けば尊厳ある一人の客として扱ってもらえた。いつの時代も、社会の中で違和感を抱えた者は、自分を完全に曲げるより、自分の考えを認めてくれる人たちと出会いたいと希求しているものである。歴史に名を残したカフェは、逸脱者たちをあたたかく受け入れてくれただけでなく、彼らと似た価値観を持つ者たちの出会いの場として機能していた。そこで彼らは志を同じくした仲間に出会い、帰ろうとした頃にまた誰かと出会い、次々とやってくる出会いの波に押され、いつまでたってもその店を出ることができなかったのだ。

こうしてカフェは居心地のよい「第二の我が家」となってゆく。カフェに行けば新聞にも書かれていない最新の情報や、まだ本に書かれていないアイデア、作品になっていないアイデアが、飛び交っていた。新しい時代を模索し、探求している者たちが出会い、彼らがお互いに刺激し合うことで、また新しいアイデアや共有知が誕生する。

イギリスのコーヒーハウスは「1ペニー大学」と呼ば



写真5 パリ、モンパルナスの「ロンド」から眺める「ドーム」。両店には世界中の芸術家が集まった

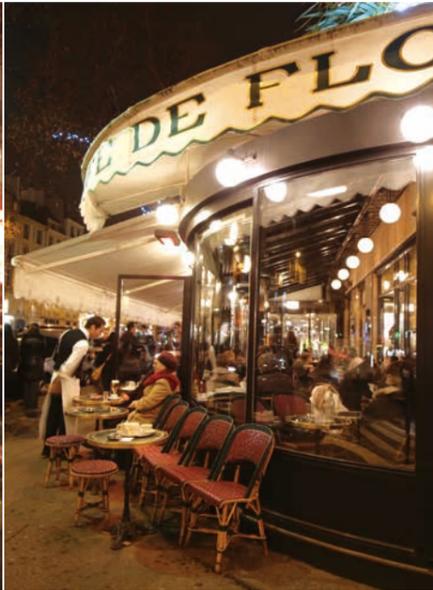


写真6 パリの「カフェ・フロール」の夜のテラス

れ、ウィーンのカフェに通っていたシュテファン・ツヴァイクは「あらゆる新しいものに対する最良の教養の場所は常にカフェだった」と述べている。モンテスキューは「カフェを出るとき、入った時に比べて4倍頭が良くなったと思わぬ者はいない」と述べている。それほどまでに、新しい時代のあり方を模索している者たちの知のぶつかり合いは刺激的であり、彼らの知性は議論によって急速に磨かれていったのだ。

カフェでの学び合いが素晴らしいのは、学校のように教師が一方向的に何かを教えるのではなく、そこに集った彼らがお互いに刺激され、負けるものと競い合うように伸びてゆくからである。カフェに集う客たちは、一杯の飲み物代さえ払えば誰もが客として対等な関係である。自分と大して変わらない、同世代の誰かが優れたことをしていれば、それは自分にだって可能なのではないかと思えてくる。彼らの姿を同じ地平で体感することでこそ、これまで不可能だと思っていたことが可能そうに思え、自身のマインドセットが変わることで、手に届かないようにみえた憧れも実現可能なものになってゆくのである。

### ヨーロッパのカフェの姿

では現代のカフェはどのように機能しているのだろうか。

ヨーロッパのほとんどのカフェは路面店であり、カフェは誰にでも開かれた半公共空間である。そこにテラス

が設置され、人々が楽しそうに談笑していると、通りすがった人は自分とそう変わらない彼らの姿を目の当たりにし、彼らの楽しそうでリラックスした姿に憧れを抱く。オープンカフェは高級バーや会員制クラブと違い、場のデザインからも、ここは誰にでも開かれた空間であると街ゆく人にアピールしている。街ゆく人はその姿を覗き込み、自分の眼前にいる人たちの姿が自分の憧れに近ければ近いほど、そこに行けばいつか自分もそうなれるのではないかと思うようになる。

テラスでくつろぐ姿を街にさらけ出すことは、そこは安全であり、そこに来ればあなたもこうなれる、と客自身が街ゆく人に向かって宣伝しているようなものである。オープンカフェが独特の魅力を放つのは、そこにいる人が有名人でも特殊な人でもなく、自分とそう変わらないように思えるのに、社会のコードからリラックスした時を過ごしているからであり、自分もその仲間入りをしたければ、必要なのはちょっとした勇気と思っただけである。

### オープンカフェとインフォーマル・パブリック・ライフ

ヨーロッパではこうしたオープンカフェが、インフォーマル・パブリック・ライフ（街中で自分らしくいられる場）の質を上げるのに貢献しているといえる。広場の中にベンチだけでなく、より長時間自分の居場所として使える場が存在する。そこでゆっくりと腰を落ち着け、飲み物片手にあたりを眺めまわすことができる。聞こえてくる

子供達のはしゃぎ声、鳩が一斉に飛び立つ音。あたりで飛び交う外国語、気づけば生演奏すら聞こえてくる。そこには人の幸せの姿が凝縮されているようである。

イタリアではいきつけのバールでエスプレッソをさっと立ち飲みする習慣があるが、ゆっくりしたい時にはカフェのテラスに座ってられる。パリのカフェにもカウンターがあり、エスプレッソを立ち飲みしたり、朝食を立ち食いできる。一方でゆっくりしたい時には街ゆく人を眺めながらのんびりテラスに腰掛けるというように、同じカフェ内での空間の使い分けが可能である。メニューもコーヒーだけでなく、アルコールやジュース、朝食からメインまで食べられるため、客にとって使い勝手が良い。1つの空間で様々なニーズに対応できるため、赤ちゃん連れから常連のおじいさんまで、多くの人を対象としており、日本のファミレスに近い使いやすさといえるだろう。

現在では北欧のコペンハーゲンでもこうしたオープンカフェが山ほどある。吹きすさぶ寒さで知られるコペンハーゲンは、1960年代にオープンカフェを導入する以前は「誰もそんなところでカプチーノを飲むわけがない」と言われていたが、現在は一年中営業しているという。それは、店側がひさしの内側にヒーターを取り付け、テーブルの横に美しいデザインの薪を使った暖房を設置するなど、テラスの環境を改善するアイデアに事欠かないからである。

世界のパブリック・ライフ改善に貢献したヤン・ゲル氏にインタビューしたところ、テラスを設置した店はそうでない時に比べ、売り上げが5倍伸びるという。それは街ゆく人が、客たちの姿を目の前に見ながら、ここでは何を食べられるのかをチェックでき、日当たりなどを確認し自分で主体的に席を選べるからである。それに対して扉の閉ざされたカフェに初めて入るのにはかなりの勇気が必要だ。店内はどんな空間なのか、メニューは具体的にどんなものか、雰囲気や想像することはオープンカフェに比べて格段に難しく、結果として彼らは失敗をさけるためにその店をスルーしてしまう。



写真7 イタリア、ヴェローナのオープンカフェやテラス席のあるレストラン



写真8 街の様子を眺めていられるパリのオープンカフェ  
写真9 コペンハーゲンのカフェのひさしに設置された暖房

### オープンカフェという場があることで

人々を歓迎するテラス、あたたかいスタッフがおり、客たちを快く受け入れてくれるカフェがあり、そこで客同士の出会いが起こっていけば、カフェはただ飲み物を飲み、休息するための場から、何かが生まれる場へと変化してゆく。ヨーロッパにおいてカフェは人々の喉の渇きを潤すだけでなく、逸脱者たちの避難所として、そして創造の場として機能してきた。既存の社会に違和感を抱えている者のためにも、まちの活気を生み出すためにも、カフェは非常に重要な場として機能する。オープンカフェが世界に比べて圧倒的に少ない日本だが、実は社会的圧力の強いこの国にこそ、こうした場が求められているのではないだろうか。